

平成 29 年 6 月 20 日現在

機関番号：35307

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370780

研究課題名(和文) 中世山陽地域における国衙宗教圏の研究

研究課題名(英文) The Study on the relationship between political power of provinces and religion around Medieval Sanyo region

研究代表者

苅米 一志 (KARIKOME, Hitoshi)

就実大学・人文科学部・教授

研究者番号：60334017

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：山陽地域(備前・備中・備後・安芸国)における国衙(国府と役人)の関係について、古文書と現地の調査にもとづいて研究を行った。備前では岡山県岡山市高島付近、備中では岡山県総社市、備後では広島県府中市、安芸では広島県府中町に関する古文書を収集し、また正月および九月の祭礼行事への参与観察を行なうことで、中世国衙における寺社祭礼の復元を行った。これにより、国衙をめぐっては天台寺院の勢力が圧倒的であり、かつそれらが末寺連合を形成していたこと、また一宮以下の神社とは僧侶による大般若経の転読によって結ばれていたことが確認された。

研究成果の概要(英文)：The Study on the relationship between political power of provinces and religion around Medieval Sanyo region. On each provinces I did collect the documents of related to province-power and participated in the festival of Buddhism temples and Shinto shrines around medieval province-offices.

研究分野：日本中世宗教社会史

キーワード：日本中世 国衙 宗教 寺社 祭礼

1. 研究開始当初の背景

中世宗教史研究において、摂関政治期以降の国家権力のあり方は近年、急速に注目されてきている。特に摂関家に従属する中・下級貴族が受領国司となり、摂関家の宗教的志向に合致させる形で、任国において多くの宗教政策を行なったことが明らかにされている。その中でも研究が進んでいるのが、いわゆる諸国一宮制の分野である。これには井上寛司が主導した一宮制研究会によるところが大きい。現在までの到達点としては、10世紀以降、日本六十六ヶ国には例外なく一宮が置かれ、各国内においてもっとも社格の高い神社として、一国全体・受領国司・国衛・在庁官人への祈禱を行なったという結論が挙げられる。一宮の成立の動機を、神社側に引きつけて考えるか、受領国司に引きつけて考えるか、という差異はあるが、上記の結論はほぼ共通の理解となっている。

しかし、その一方で仏教寺院についての注目は少ない。本格的な言及としては、井上寛司による「一宮と対応する寺院との協同関係」という図式の提示がある。具体的には、出雲国における杵築大社(出雲大社)と鰐淵寺の関係である。鰐淵寺の僧侶は、杵築大社における祭礼に対して大般若経の転読を以て奉仕し、これにより神仏習合の理念が保たれた。一方、神社と寺院には独自の役割分担があり、「神仏習合であるとともに神仏隔離である」という原則もしめされている。一宮ばかりでなく、国衛の筆頭寺院への注目は重要な視点と言えるが、これは研究者の間で共有されているとは言いがたい。

神仏習合という点は、自明の理なのであるから、一宮だけでなく国衛の筆頭寺院に注目し、両者の関係性を探ることは、重要な論点を提示するものと言える。着想の出発点は「一宮ばかりでなく国衛の祈禱を行なう寺院についても注目すべきだ」という極めて当然の発想にある。しかし、この点は学界の共通理解とはなっていない。その原因としては、地方寺院の文書が等閑視されてきたこと、中世後期における守護と寺院の関係にばかり注目が向けられてきたこと、一宮に比べて寺院の史料に政治性が乏しいと先見的に考えられてきたこと、などが挙げられる。

一宮ばかりでなく、国衛の筆頭寺院への注目は重要な視点と言えるが、これは研究者の間で共有されているとは言いがたい。神仏習合という点は、すでに自明の理なのであるから、一宮だけでなく国衛の筆頭寺院に注目し、両者の関係性を探ることは、重要な論点を提示するものと考えた。

2. 研究の目的

中世山陽地域の国衛をめぐる宗教構造を明らかにする。従来、注目されてきた諸国一宮にくわえ、国衛の祈禱を行なう寺院を特定し、寺院・神社の関わりを軸として、そこから伝播する宗教・文化のあり方を考察する。

具体的には、応募者が行なってきた播磨・備前についての研究方法をふまえ、その方法論を備中・備後・安芸国に拡大して検証する。まず、国衛の筆頭寺院を文献史料から確定し、一宮との宗教的關係を探る。さらに現在、そうした寺社において行なわれる修法・祭祀の実態と歴史上における伝播状況を確認する。これにより、国衛をめぐる寺社にはどのようなものがあり、またそこでは如何なる修法・祭祀が行なわれていたかを確定する。この作業を通じて、国衛をめぐる寺社が如何にして一国内の安穩の達成などの宗教的課題を担ったかを明らかにする。

3. 研究の方法

自治体刊行史料の総覧、および博物館などに寄託された寺院文書原本の閲覧。それにより、国衛に深い関係のある寺院を特定するとともに、国衛・一宮との関連を探った。

国府・一宮・寺院付近の地理的環境の確認。特に、自治体税務課に所蔵される地籍図を閲覧・複写し、中世に由来する地名を確定した上で、三者の空間構造を特定した。

一宮・寺院における祭礼・修法への参与観察と撮影・記録。同様な祭祀・修法を行なう国内寺社を検索し、一宮と国衛系寺院からの宗教伝播の実態を確認した。

具体的には、平成26年度に安芸国を主たる対象とし、『広島県史』資料編など広島県内において、安芸国域に含まれる自治体史の史料編を総覧して、国衛の祈禱を行なう筆頭寺院を確定した。これにより、府中町内における天台五箇寺と呼ばれる寺院を確認することができ、またそれが在庁官人である田所氏の氏寺的な存在となっていたことも推測された。活字史料が不完全なものについては、広島県立博物館など原本・写真帳の所蔵機関に出向き、その照合を行なうとともに、機関の研究者から原本の伝来や保存状況などの知識の提供を受けた。

平行して、府中町の固定資産税課において、地籍図の閲覧・複写を行ない、現在の都市計画図に地名をプロットした。また、国務文書として重要な「田所文書」や高田郡司関係文書とも照合を行ない、個々の地名の意味を考えた。さらに一宮(厳島神社)・国衛系寺院の所在地の地籍図を閲覧・複写して同様の作業を行なった。

また、厳島神社および国衛系寺院の修法・祭祀のうち、主要なものに絞り、参与観察と記録を行なった。特に、修正会・修二会・夏祭り(水無瀬祓)・九月九日会・除夜(追儺)などであり、これらの準備段階から撤収にいたるまでを撮影・記録し、あわせて主催者参加者などから、その意義や由来について聞き取り調査を行なった。

平成27年度には備後国を対象とし、『広島県史』資料編などの自治体史を総覧して、備後国における国衛の祈禱を行なう筆頭寺院

を確定した。特に一宮（吉備津宮）の所在地である福山市、備後国府の所在地である府中市に目星をつけて絞り込みを行なった。活字史料が不完全なものについては、博物館・資料館など原本・写真帳の所蔵機関に出向いて、活字との照合を行なった。しかし、備後国においては、吉備津宮と関連深い寺院を確定することは出来ず、さらに一宮は実際には素戔鳴尊神社ではないかという疑問も湧いた。この点は、今後の課題である。

平行して、国府所在地の所属する自治体（府中市）の固定資産税課において、地籍図の閲覧・複写を行ない、現在の都市計画図に地名をプロットした。さらに一宮（吉備津神社）・国衛系寺院の所在地の地籍図を閲覧・複写して同様の作業を行なった。なお、日程の都合により、吉備津宮祭礼の参与観察は十分には出来ていない。

平成 28 年度には、備中国を対象とした作業を行なった。『岡山県古文書集』『吉備津神社文書』を総覧し、備中国における国衛の祈禱を行なう筆頭寺院を確定しようとした。特に一宮の所在地である岡山市、備中国府の所在地である総社市に目星をつけて絞り込みを行なった。その候補としては、吉備津神社内の神宮寺、従前の国分寺、倉敷安養寺などの存在が挙げられる。前年度と同様に、活字史料が不完全なものについては、博物館・資料館など原本・写真帳の所蔵機関に出向いて、活字との照合を行なった。

平行して、総社市の固定資産税課において、地籍図の閲覧・複写を行ない、現在の都市計画図に地名をプロットした。さらに一宮（吉備津神社）・国衛系寺院の所在地の地籍図を閲覧・複写して同様の作業を行なった。

また、吉備津神社および国衛系寺院の修法・祭祀のうち、主要なものに絞り、参与観察と記録を行なった。特に、吉備津神社の協力により、本殿の外陣・内陣に立ち入らせてもらい、内部の結構が典型的な神仏習合に基づくものであることを確認した。それが神社を復興した俊乗房重源の影響によるものであり、天台浄土教の色彩の強いものであることもあわせて確認された。

4. 研究成果

中世山陽地域（備前・備中・備後・安芸国）における国衛（国府と役人）の関係について、古文書と現地の調査にもとづいて研究を行なった。備前では岡山県岡山市高島付近、備中では岡山県総社市、備後では広島県府中市、安芸では広島県府中町に関する古文書を収集し、また正月および九月の祭礼行事への参与観察を行なうことで、中世国衛における神社祭礼の復元を行なった。

その結果、10 世紀末以降、撰関家による天台浄土教への保護と対応し、受領国司がそれへの宗教的迎合を行なう形で、国内の天台系寺院を保護し、さらには新たに寺院を建立する場合があることも明らかになった。また、

そうした寺院は一宮における祭礼とも深いつながりを持ち、この関係がやがて郡・郷や荘園における〈荘鎮守 祈願寺〉という二頭体制を生みだしていく。国衛における〈神社 寺院〉関係が、のちの地域的宗教構造に圧倒的な影響をおよぼしている。

国衛をめぐる天台寺院の勢力が圧倒的であり、かつそれらが末寺連合を形成していたこと、また一宮以下の神社とは僧侶による大般若経の転読によって結ばれていたことが確認された。その成果は、主として山陽地域を素材とした寺社古文書および縁起の研究論文として結実している。

後掲論文「創りだされる神々の縁起」は、本研究における作業の成果を受け、蒙古襲来から南北朝内乱にかけて作成された寺社縁起における語りに注目したものである。この時期に、日本の神々の性格がどのように変化し、それが寺社縁起にどのように記録され、語られていくかについて考察した。戦乱状況と武士の文化加担という点に注目し、この時期に八幡神以外の神祇においても、武神・軍神化が進むこと、武士自身も神格化されていくことを論じた。特に、山陽地域における足利尊氏・赤松円心の転戦において、寺社が城郭のような役割を果たし、実際に僧兵も戦闘に加担していること、それを契機として、室町期にはこの地域に禅宗寺院が展開していくこと、などの見通しが得られた。

同じく「木山寺の中世古文書について」は、祇園社の牛頭天王を祀ることで著名な岡山県真庭市の木山寺・木山神社の所蔵史料について考察したものである。同寺社の所蔵史料調査に基づき、中世古文書を読解・翻刻した上で、主として室町～戦国期における美作国の政治状況と絡めて、中世古文書一点一点についての解説を行なった。その結果、同寺社は戦乱状況に応じて、地域の権力者に接触を試みており、権力者の側からも地域の寺社を把握しようとしている様子が確認された。地方寺社の古文書は、そうした接点において形成されるものであるが、両者の接触という場において、寺社の側からは権力者への忖度・迎合が働き、そこに新たな寺社縁起が生み出される契機があることも確認できた。

著書『吉備地方中世古文書集成（1） 備前西大寺縁起』は従来から進めてきた「備前西大寺文書」の撮影と翻刻の作業の成果である。担当した「解説」においては、古文書に基づき、備前西大寺の歴史を述べるとともに、古文書の状態、原本・写の区別、近世初頭における一斉筆写の状況について指摘している。同寺は平安末期に在庁官人の近縁の女性によって建立された観音堂が出発点となっているが、戦乱状況の推移によって、守護大名クラスの権力者との結びつきを強め、それが戦国期には、赤松氏・浦上氏・宇喜多氏と移り変わっていく状況が観察された。これは、もともと国衛に関係深かった寺院が、室町期には守護大名に依存していくことを

示すものであり、他国の同様な寺院においても観察できる問題であるとの認識を得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

苅米一志(単著)「木山寺の中世古文書について」中山一磨編『神と仏に祈る山』法蔵館、2016年10月、141~158頁

苅米一志(単著)「創りだされる神々の縁起」中島圭一編『十四世紀の歴史学』高志書院、2016年4月、203-229頁

[学会発表](計2件)

苅米一志(単独)「禅律仏教による意識と実践」人文知のトポス、於就実大学、2015年10月17日

苅米一志(単独)「中世文書から見た明応年間の復興造営」日本古文書学会大会、於就実大学、2015年9月12日

[図書](計3件)

苅米一志(共著)『吉備地方中世古文書集成』就実大学吉備地方文化研究所、2017年3月、編集・「解説」担当、1~6頁

苅米一志(単著)『殺生と往生のあいだ』吉川弘文館、2015年11月、1~224頁

苅米一志(単著)『日本史を学ぶための古文書・古記録訓読法』吉川弘文館、2015年2月、1~197頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

苅米 一志 (KARIKOME Hitoshi)

就実大学・人文科学部・教授

研究者番号：60334017